発問例

●二一〇ページ

問 **「一様に怒っているような顔」（6行目）「脇目も振らず」（7行目）という電車を降りた人々の動作からどのような様子が伝わるか。**

答 皆が同じ方向に、同じように進む様子。

補 同じ行動をする人々と「ぼんやり」（4行目）座る「私」との間にある距離、周囲と「私」の差を把握する。この周囲と「私」の間の差は、このあと次第に示されていく戦時体制における周囲の人々の様子と「私」との差にも繋がる。

●二一一ページ

問 **◎「苦しい気持ち」（3行目）になるのは、なぜか。**

答 「私」は、世間と儀礼的に関わっていくことに違和感を持っているから。

補 「大戦争」（11行目）が始まる以前における「私」の性格や態度を把握しておきたい。

●二一二ページ

問 **◎「自信を失ってしまった」（2行目）のは、なぜか。**

答 「大戦争」が始まることで、若い女性は工場での勤労奉仕や出征する男性との結婚がそれまで以上に要請される雰囲気が生まれ、今までの「私」の家事手伝いのあり方では、直接に役立っていないように感じさせられているから。

補 それまで「母と二人きり」（二一一・9）で感じていた幸福感や安心感が、外的な要因で脅かされ、「私」に動揺を齎していることを把握したい。

語句の研究

●二一〇ページ

4ぼんやり改札口を見ているのです。　「ぼんやり」とは、はっきりしない様子を意味するが、一般的に乗降客以外の人物が駅の改札を訪れるのは、誰かを待つ、誰かと待ち合わせるという明確な目的があってのことである。その改札口を「私」は「ぼんやり」見ているという。第一段落の「誰とも、分からぬ人を迎えに」（二一〇・1）と同じ意味合いである。

キー・ポイント　ぼんやり　「私」は自分の状態をこの後も「ぼんやり」（二一〇・8、二一一・14、二一二・4）と表現している。しかし、「私」の言う「ぼんやり」は表面的なもので、心の内では周囲と自分の違いに不安や孤独を感じ、葛藤している点に注意したい。加えて、「私」の前を通り過ぎていく周囲の人々に、この葛藤する声は聞こえないが、読者はそれを聞く立場にあるという点も、第五段落の「あなた」（二一三・14）という呼びかけと合わせて把握したい。

4上り下りの電車　電車の進む方向をさし、「上り」とは終点から起点へ進み、「下り」とは起点から終点へ進む。

5たくさんの人が電車の戸口から吐き出され、どやどや改札口にやって来て、　「吐き出され」「どやどや」は、いずれも人が一斉に勢いよく押し寄せる様子をあらわす。この人々が、「一様に、怒っているような顔」（二一〇・6）で「脇目も振らず歩いて」（二一〇・7）いくのである。

●二一一ページ

1お変わりありませんか、寒くなりました、などと言いたくもない挨拶を　「お変わりありませんか、寒くなりました」は時候の挨拶。こうした挨拶は、人とのコミュニケーションを円滑に行うためには必要なものだが、「私」はうわべだけの儀礼的な関係に違和感を持っているため「言いたくもない

挨拶」と語っている。

5相手の人のけちな用心深さが悲しく　「けちな用心深さ」とは、相手が「私」を警戒して適当なお世辞を「私」に言う時の、世の中をやり過ごすためのうわべだけの態度をあらわす。「私」は自分だけではなく、相手もまた、儀礼的であることを指摘している。

6こわばった挨拶　ここでは、「言いたくもない挨拶」（二一一・2）や「当たらず障らずのお世辞」（二一一・4）、「もったいぶったうそ」（二一一・4）をさす。また、「こわばった」という表現からは、「私」が人との付き合いに窮屈さを感じていることがうかがえる。

キー・ポイント　**大戦争**　昭和十六（一九四一）年十二月八日の真珠湾攻撃から始まる米英との戦争は、周知のとおり、否応なく人々を戦争へと駆り立てていった。昭和十二（一九三七）年の盧溝橋事件を発端とする日中戦争においても、第一次近衛文麿内閣によって国民精神総動員運動が提唱され、思想や生活様式の統制がはかられたが、そうした人々を統制する動きは、この頃より一層強められていった。男性は召集され戦地へ、そして女性も〈報国〉や〈銃後〉のために動員されたのである。たとえば、真珠湾攻撃の少し前、十六（一九四一）年十月には、厚生省が人口政策の一環として結婚を奨励する通達を出し、結婚と〈報国〉が結びつけられて説かれていた（参考文献「日本女性史事典――トピックス１８６８―２０１５」日外アソシエーツ編集部編、平二十八）。「待つ」のなかで「二十歳の娘」である「私」が、「私は誰を待っているのだろう。旦那さま。違う。恋人。違います」（二一三・6）と否定する背景に、このような当時の状況を含みこむことも可能だろう。また、「私」が「身を粉にして働いて、直接に、お役に立ちたい気持ち」（二一二・1）、「身を粉にして働いて、お役に立ちたいというのはうそで、本当は、そんな立派そうな口実」（二一二・13～14）と語る背景にも、女性が戦時体制の中で男性労働力の代わりとして動員される様子がうかがえる。こうした当時の状況が、家で母と縫い物をする生活を大切にしていた「私」に、「今までの生活に、自信を失ってしまった」（二一二・1～2）と語らせているのである。

注意する語句

（＊で用例を示した）

一様に…全部同じ様子であること。そろっているさま。同様。
＊人々は一様に黒い服を着ていた。

そそくさと…挙動が落ち着かず、せわしいさま。
＊彼女はそそくさと立ち上がった。

脇目も振らず…そのこと以外に目を向けず、一心不乱であるさま。
＊大学受験のため、脇目も振らず勉強した。

冷や水をかける…まるで冷水を浴びせるように、元気や活気を失わせる。
＊冷や水をかけられたように、会場は静かになった。

息が詰まる…緊張して息苦しくなる。息詰まる。
＊その部屋は、息が詰まるような雰囲気に包まれていた。

いい加減…深く考えないで、投げやりなさま。おざなり。無責任。
＊彼はいい加減な人だ。

当たらず障らず…差し支えのないよう気をつけて行動するさま。

＊彼は、どんな質問にも当たらず障らずの答えしか言わなかった。

もったいぶる…いかにも重々しげに振る舞う。もったいがる。

＊もったいぶらずに教えて欲しい。

身を粉にする…労力を惜しまず一心に努める。身を砕く。

＊このプロジェクトは身を粉にしてもやり遂げるべきだ。